



Title	名詞型助数詞の構文と傾向
Author(s)	東条, 佳奈
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2014, 48, p. 83-100
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56620
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

名詞型助数詞の構文と傾向

東 条 佳 奈

キーワード：助数詞／数量詞構文／新聞コーパス／付加的同格／属性規定

1. はじめに

日本語では事物を数える際に「紙1枚」の「枚」のように、助数詞とよばれる接辞を義務的に伴う。こうした助数詞は、「リットル」などの単位を除くと、数詞と切り離れた時に単独で用いることができないものとするものと分けられる。「枚」「冊」「匹」といったいわば典型的な助数詞は前者にあてはまる。後者は、「3大学」の「大学」、「3票」の「票」のように、「偶然ではなく、あるものを数える助数詞が、数えられる物を表わす名詞と同じ形態をとる（成田 1990）」ものである。従来の助数詞研究は、前者の典型的な助数詞を対象とするものが多く、後者のような「名詞と同じ形態をとる」助数詞については十分な検討がなされているとはいいがたい。本稿では、後者にあたる助数詞を「名詞型助数詞」と呼び、これらが文章の中でどのように用いられるか、構文的な観点から用例を検討する。

2. 名詞型助数詞に関する本研究の立場

名詞と同じ形態をとる「名詞型助数詞」の研究として、先駆的なものは成田（1990）である。成田は名詞型助数詞¹⁾を意味領域により大きく4種に分類し、これらが抽象的な類型を示すものに多いことから、日本語の助数詞

が貧弱であった範囲を補う形で使われている可能性を示している。

また、東条（2014）では、名詞型助数詞を、前接する数に制限がなく、「1、2、3…」と積み上げ式に数えることが可能かどうかという「可付番性」の有無により大きく二分し、可付番性のある「助数詞に準ずる存在となる名詞」である「準助数詞」と、可付番性がなく、数と名詞の結びつきが臨時的であるため、数を自由に入れ替えることができない、見かけのみ助数詞を模した名詞である「擬似助数詞」という下位類を示した。「準助数詞」は、「何項目」や「何パターン」のように、不定数である「何」を冠することが可能であり、「抽象的な事柄を表す」ものが多いという特徴をもつ。一方で、「擬似助数詞」は「容疑者」や「患者」のように、「人物や機関など具体性の高い名詞を用いる」ことが多い、というように、両者は意味領域の面で違いがある【表1】。そして「名詞型助数詞」にはこのほか、「さら」や「はこ」のような容器を基準に物の数量を数える「容器型助数詞」があり、最も典型的な助数詞に近いものが「容器型助数詞」、最も助数詞から遠いのが「擬似助数詞」であるとした。しかし、東条（2014）は名詞型助数詞の分類概念の提示に留まっているため、それぞれの類型の特徴をより明確にしていく必要がある。そこで、本稿では、「準助数詞」と「擬似助数詞」が構文的にどのような傾向をもつのかについて、新聞コーパスから得た用例より分析した。

3. 数量詞構文と名詞型助数詞

3.1 数量詞構文の形式と機能

まず、数量詞構文に関する形式と機能について触れる。「3匹」のような、「数詞＋助数詞」のまともりは、一般的に「数量詞」と呼ばれ、これまでの数量詞研究では、これらが文の中でどのような位置に出現するか、という議論が多くなされてきた。こうした数量詞の出現位置については、四つの型があるとされる（奥津 1983、矢澤 1985、宇都宮 1995,1996、Kim1995、Downing1996、岩田 2013 等）。これらについて N = Noun（名詞）、C = Case

表1 1991年毎日新聞より抽出した名詞型助数詞²⁾

意味分野	中項目	＜可付善性があるもの＞239種	＜可付善性がないもの＞147種
抽象的関係	事柄	(3) 項目、条項 候補	(3) 事件 不思議 代表
	類	(2) 機種、家種、車種、種目、職種、事例、スタイル 種類、品種、部門、ジャンル、パターン、モデル、タイプ 階級、系統、段階、段、ランク 条件、(因主)	
	様相	(3) 素顔 成分、要素	
	作用	(4) ルート、コース 往復 編成	
	時間	(7) (昼夜) 期間、(半期)、シーズン ステップ 舞台 場所	(3) 四半期、時限 ポスト
	空間	(22) 会場、(基地)、球場、地点、(聖地)、部位、コーナー 筋 枠、議席、区画、区間、口座、(選挙区)、打席、地域、地区、分野、ゾーン、ブロック 方面 画面	(2) 焦点 海域
	形	(1) サイズ	
	量	(45) 得点 (風速数)、チャンネル、カウント 気圧 けた、単位 グループ、シリーズ 組、こま、串、袋、箱、粒、ます、回線、学年、街、級、句、語、字、車線、世紀、席、世代、通話、頭身、馬力、瓶、紙、文、イニング、オクターブ、カップ、カロリー、シート、セット、バック、ページ、ポイント、マイル、ラウンド、レーン	(1) 指数
		計108種	計8種
人間活動の主体	人間		(5) 女性 少女、少年、青年、幼児
	家族	(2) 家族、兄弟	(1) 姉妹
	人物	(1) 選手	(10) 外国人、島民、邦人 大統領 藩士 患者、新人、政治家、博士、要人
	成員	(4) 役 アーティスト 業者 メーカー	(50) 委員、議員、組員、組員、行員、市議、社員、重員、職員、隊員、町議 記者、教師、教授、教諭、大関、作家、横綱、力士 外相、閣僚、裁判官、常務、大使、頭取、判事、奉行、弁護士 農家 船員 警官 園児、学生、高校生、生徒 兵士 会長、学部長、幹部、議長、校長、市長、社長、首脳、知事 創設 監督、投手、被告、容疑者
	公私	(8) 家庭、世帯 都市 区、市、市町村、都道府県、州	(6) 個人 加盟国、共和国、国家、大国 直都
	社会	(16) フロア (教会)、教室、学部、大学、(寺院) 駅、銀行、工場、(事務所)、(取引所) 劇場、支店、店舗、病院、ホテル	(18) 高校、私大、小学校、大学院、短大 証券取引所、商品取引所、ターミナル、金融機関、公社、施設、証券会社、橋金、製鉄所、放送局 画廊、商社、百貨店
	機関	(28) 機関、支部 省庁 施設 (委員会)、議会 部隊、(旅団)、(連隊) 学級、球団、(協会)、組合、劇団、自治体、陣営、(政党)、(組織)、団体、党、派閥、法人、クラス、クラブ、サークル、チーム、パーティー、バンド	(13) 大使館 県警、原子力発電所、原発、裁判所、発電所 審議会 シンジケート、リーグ、基金、地方自治体、野党、労組
		計59種	計103種
人間活動、精神および	心	(16) 区分、分別、分類 議案、テーマ 科目、教科、学科、講座 説 (法) 方式、(制度) 案、法案、プラン	(5) 選挙 原則、条約、新法 政策
	言語	(11) 言語 銘柄、タイトル、ブランド 単語 文字 (文書) 演目、番組、品目、(プログラム)	(10) 地名 漢字 指標 通達 協議、決議 声明、宣言、布告 揮毫書
	芸術	(3) 作品 カット 曲	
	生活	(16) 安打、競技、試合、四球、(四死球)、盗塁、本塁打、ゲーム、(トライ)、パーティー、バット、ホームー、ホール、ボギー、レース、(併投)	(4) 公害 スポーツ、ボーク、死球
	交わり	(3) (競技会)、大会 引き分け	(3) 部会 金見 協定
	待遇	(1) セーブ	
	経済	(1) 株	
	事業	(3) 事業 企業 公演	(2) 現象、空室
		計54種	計24種
生産物および用具	物品	(1) 商品	(1) 証券
	衣料	(1) (ベッド)	
	資材	(1) ボタン	
	食料	(1) 食品	
	住居	(3) ハビリアン 部屋 ドア	(1) 住宅
	道具	(3) ケース 鉢 針	(1) 弾頭
	機械	(1) 列車	(2) レーダー 外国車
	土地利用	(3) トラック 路線 空港	(2) 原子炉、高炉
		計14種	計7種
自然現象	物質	(2) 分子、(物質)	
	天地	(3) 大陸 河川 場面	(3) 鉱床、活火山 湖沼
	身体	(1) 遺体	(1) 死体
		計6種	計4種

(格助詞)、Q = Quantifier (数量詞) として表わすと以下ようになる。

- ① NCQ 型 「鉛筆を 5 本削る」／「仔猪が 3 匹住んでいる」
- ② Q ノ NC 型 「5 本の鉛筆を削る」／「3 匹の仔猪が住んでいる」
- ③ NQC 型 「鉛筆 5 本を削る」／「仔猪 3 匹が住んでいる」
- ④ N ノ QC 型 「鉛筆の 5 本を削る」／「仔猪の 3 匹が住んでいる」

これらの四つの型を、岩田 (2013) では、多くの研究で議論の出発点になっていることから、「定番 4 形式」としている。また、これらの形式は以下のような意味機能と関わりがあることも指摘されている。

①の NCQ 型は、生成文法などの分野で、数量詞遊離構文と呼ばれる型である。NCQ 型がどのように派生されたのか、成立条件はどのようなものかということが多く議論されているが、本稿ではこの問題については扱わない。ただし、主語 (ガ格)・目的語 (ヲ格) からの数量詞が NCQ 型をつくりうするという点、また、NCQ 型の Q は、常に新情報を示し、文の中で伝えたいことの中心部分に関わって焦点化していることから、NCQ 型は「無標の数量伝達形式」とであるとされている (岩田 2013:19)。また、宇都宮 (1995,1996) によれば、NCQ 型は、名詞の数量を特定するという「量化」の機能でしか用いられないという。「量化」は数量詞の最も基本的な機能であり、数量詞を他の品詞と区別する特徴であるという。このことから、数量詞構文の中で最も基本的な型は NCQ 型であるといえる。

②の Q ノ NC 型は、典型的には N が定名詞句である場合に成立し、全体や集合を表すものである。宇都宮では、Q ノ NC 型は名詞 = 数量詞の意味を示す「付加」機能 (「数万人の人口」など)、先行詞を修飾し、属性を規定する「限定」機能 (「4 人のグループ」「2000cc の車」) で表出するという。

③の NQC 型は、奥津 (1969) によれば、「太郎は本 3 冊を買った」のように、「本 3 冊」が目的語になること、また、「太郎が買った本」「太郎が買った 3 冊」のように連体修飾を受けて名詞句を作れることから、これらは「総理大臣 佐藤栄作」のような同格名詞構造を持つものであるという。宇都宮も、NQC 型には名詞 = 数量詞を示す「付加」機能があると述べている。ま

た、「議長ら数名」のように、この型には「名詞の総数量を数量詞がまとめて示す」という「統合」の機能もあるという。そして、NQC型はQがNの後方にあることから、Qに重点を置いた表現となるため、新聞においてよく使われるという（岩田2013）。

④のNノQC型は、奥津（1983）、矢澤（1985）らによって、部分数を表す形式であることが指摘されている一方で、Downing（1996）では「彼女と妹のかえこの二人」「赤と緑の二色」のように、「付加的同格」（summative appositive、訳は岩田2013:79）を示すものであるとする。宇都宮（1995）の用語でいえば、前者は「分析」機能（「教団の4人」「全国の10都市」など）、後者は「統合」機能にあたるとされる。また、岩田ではこれに加えて、「中年者の三人」「学生の三人は、1000円だけでいいからね」のように、Qの属性をNが示すものがあることを指摘している。

3.2 名詞型助数詞と構文

数量詞研究においては、どのような助数詞が来るかはほとんど問題とされないが、通常数量詞構文として取り上げられるのは典型的な助数詞のようである。それでは、名詞型助数詞は先行研究の中でどのように位置づけられるのであろうか。成田（1990）では、名詞型助数詞をA「分類項目・構成要素」、B「役職・役割」、C「容器（連続量として測られるものを、容器等を目安に数えているもの）」、D「その他」の四つに分けた上で、「数詞＋名詞型助数詞」をQと捉え、それぞれのグループごとに構文的な特徴を述べている。成田によれば、AやBにあたる語は、(1) ③の「そのようなところが3大学できた」のように、助数詞相当部分（「大学」）と、数えられるものを表わす名詞（「ところ」）とが同形でない場合にしか用いることができず、また、副詞的な位置への生起にも制限があるという。

(1)³⁾ ①*ことし、{3大学の大学が／大学3大学が／大学が3大学} できた。

②ことし、{*3大学の特色ある大学が／? 特色のある大学3大学が／? 特色のある大学が3大学} できた。

③ことし、{*3大学の、そのようなところが／そのようなところが3大学} できた。

(2) 1000票の票を集める／票1000票を集める／票を1000票集める

Cは、連続量として測るもの、要素が多いものを、容器を目安に数えるタイプである。本稿2節でいう、「容器型助数詞」にあたる。これらは、「寿司の皿が2さらある」のように、「数えられるものを直接表す名詞（寿司）＋の＋助数詞（さら）」という形式であれば表現できる（成田1990:5）。

残るDのうち、「品」「目（編み物など）」「曲」「票」は、(2)のように、助数詞相当部分と同形の名詞が共起でき、また構文的にも制限なく使うことができるという。成田は、こうした「票」などが最も助数詞に近く、次いでA、Bの順に助数詞から遠くなることを指摘している。また、名詞型助数詞を「名詞」として見た際に、それらを数えるために適当な助数詞が他に見つからない場合に、助数詞らしい助数詞としての性質を備えると述べており、こうした点からも、「票」は典型的な助数詞にかなり近いものであることを指摘している（成田前掲:5-6）。

一方、田中（2012）は、「数詞＋名詞」部分が副詞的位置に生起するか否かにより、数詞に続く名詞部分を助数詞か名詞か判断している。成田では、名詞型助数詞はNCQ型に制限があるとしているが、田中の基準では、NCQ型になるもののみが助数詞であるということになる。連用修飾することが数量詞（を構成する助数詞）の特性であるというのは従来指摘されている通りであり、田中に従えば、NCQ型をとらないものは対象から除く必要がある。しかし、NCQ型をとるというのは、助数詞の「現象」であって「本質」ではないと思われるため、どのような語がNCQ型という現象をとるのか、という本質的な部分を探る必要があるといえる。そのため本研究では明らかに助数詞であるもののみを対象とするのではなく、田中の基準よりも大きく名詞型助数詞を捉えた上で、「可付番性」のあるものを助数詞、ないものを「擬似助数詞」とする。

また、Kim（1995）は、「数詞＋名詞」が作る構文を「Type QN」とし、

「一目（ひとめ）」や「双子（ふたご）」のような和語数詞から成る QN と「一作家」「二文」「三銃士」のような漢語数詞から成る QN を挙げ、和語では慣用的・古典的表現として、漢語では専門的・公的な文章でよく使われることを指摘する。Kim は QN を連体数量詞構文「Q ノ N」（「3 本の鉛筆」にあたる）と類似した構造をもつものと位置付けているが、これらの表現は古典的な慣用表現の形式がレトリックの技巧として残っているにすぎないとしている。しかし、実際にはこうした QN タイプの表現は、慣用的表現に留まらず用いられており、新聞一年分のデータから収集しただけでも 400 種近くの名詞型助数詞が得られているため、検証の必要があるといえる。なお、本研究では、「一目」「三銃士」のように、数詞部分が切り離せず、一語となっているものについては対象にしない。

以上のことを踏まえ、これまで本研究で収集してきた名詞型助数詞はどのような構文的特徴をもつものなのか、次節より検討する。なお、本稿では成田（1990）に倣い、「数詞＋名詞型助数詞」を Q と捉えることにする。

4. 調査対象と方法

東条（2014）では、『CD- 毎日新聞データ集⁴⁾』を用いて、1991 年の全紙面データより、386 種の名詞型助数詞を抽出した（表 1）。本稿では「準助数詞」と「擬似助数詞」の構文を調査するため、東条（2014）で抽出した 386 種の名詞型助数詞より、「容器型助数詞」にあたるもの⁵⁾を外した 375 種の語を調査対象とした。このうち、副詞的位置に生起する（NCQ 型である）例を 1991 年～2010 年の 20 年分の毎日新聞データを対象に調査したところ、NCQ 型である例が最も多かったのは 2010 年の 77 例であった。名詞型助数詞が一番作りにくい構文が NCQ 型ならば、この構文が最も多かった年は、名詞型助数詞の文型のバリエーションも多いと判断し、2010 年の全紙面を対象に、他の「定番四形式」の構文の型も調査した。

用例の収集にあたっては、「洋数字⁶⁾」＋「助数詞相当部分の名詞」＋「が

／を／の」をキーとしたKWICを作成・整理し、QノNC型、NQC型、NノQC型となるものを抽出した。なお、本調査では、「1票の格差」のように、「数詞＋名詞」と修飾される名詞とが互いに参照し合っていないものは対象から外した（「3匹のコブタ」は、3匹というQがコブタの数量を示しているが、「1票の格差」の場合、格差の数量を示しているわけではない）。

5. 結果と分析

5.1 各形式の出現頻度

調査を行った結果、NQC型77例のほか、QノNC型が452例、NQC型が961例、NノQC型が657例となった。以下、準助数詞・擬似助数詞ごとに見ていく。

5.2 準助数詞の語例と出現頻度

5.2.1 NCQ型

準助数詞の語例と出現頻度を【表2】に示す。NCQ型は、23種77例得られたが、これらは全て準助数詞にあたるものであった。語例の用例数を意味分野別に見ると、ほとんどが「抽象的關係」に集中しており（14種51例）、次いで「人間活動－精神および行為（以下、「精神・行為」）」が3種16例、「人間活動の主体（以下、「人間主体」）」が5種7例、「生産物および用具（以下、「生産物」）」は1種3例、「自然物および自然現象（以下、「自然物」）」に該当する例はなかった。NCQ型の例を見ると（3）の「車種」のように、先行詞となる名詞（N）とQ部分の名詞（以下、n）が同一の例は少なく、多くは（4）（5）のように少々ずれがあるものであった。

（3）防止機能が働かずに閉まる車種が7車種あった。（7/22国⁷⁾）

（4）竹窓や掘りごたつのある和室が1部屋ある他は大半が土間。（3/23社）

（5）夏は決勝の延長引き分け再試合が2試合ある。（4/4社）

NCQ型は3節で述べたように、名詞の数量を特定する「量化」の機能を

表2 2010年準助数詞 各形式の語例と出現頻度

NCQ型		Q/NC型		NCQ型			N/QC型		
議席	11	種類	225	試合	196	業者	3	チーム	62
試合	9	組	43	選手	52	タイプ	3	種類	47
種類	9	項目	31	項目	51	コース	3	学部	2
段階	9	段階	18	種類	38	候補	2	言語	2
往復	7	分野	14	団体	31	議席	2	競技	2
曲	6	品目	10	組	30	部屋	2	州	2
チーム	3	種目	10	機種	29	クラス	2	学科	1
部屋	3	チーム	8	作品	29	法	2	品	1
車種	2	けた	7	曲	27	公演	2	委員会	1
項目	2	ページ	5	チーム	27	自治体	2	基地	1
ランク	2	段	5	党	25	アーティスト	2	タイトル	1
けた	2	ラウンド	5	事業	24	議案	2	候補	1
階級	2	銘柄	4	法案	16	大学	2	市町村	1
店舗	1	分類	3	品目	15	言語	2	票	1
組合	1	品	3	店舗	15	クラブ	2	役	1
席	1	店舗	3	路線	14	語	2	文字	1
パターン	1	編成	3	安打	11	家族	2	階級	1
段	1	世帯	3	案	10	シリーズ	2	都市	1
句	1	ブランド	3	都市	10	世代	2	方式	1
施設	1	グループ	3	分野	9	トラック	1	機関	1
株	1	曲	3	株	9	学科	1	品目	1
区	1	試合	3	法人	8	レース	1	組	1
系統	1	コマ	3	商品	7	カット	1	要素	1
総計	77	字	3	席	7	学部	1	分野	1
		職	2	州	7	コーナー	1	球団	1
		種	2	地域	7	病院	1	機	1
		タイプ	2	世帯	6	ポイント	1	条件	1
		クラス	2	部門	6	教科	1	遺体	1
		部門	2	字	6	教席	1	字	1
		タイトル	2	市	6	ページ	1	店舗	1
		ブランド	2	市	6	事例	1	世帯	1
		作品	1	機関	6	銀行	1	区	1
		モデル	1	工場	6	メーカー	1	席	1
		路線	1	施設	6	ラウンド	1	商品	1
		車種	1	区間	5	コマ	1	組合	1
		パターン	1	銘柄	5	品	1	地域	1
		家族	1	役	5	品種	1	段階	1
		施設	1	競技	5	段	1	テーマ	1
		科目	1	大会	5	省庁	1	句	1
		句	1	大会	5	遺体	1	銘柄	1
		機種	1	句	5	物質	1	陣営	1
		語	1	グループ	5	プログラム	1	議案	1
		地区	1	地区	4	陣営	1	ブランド	1
		文字	1	文字	4	地点	1	自治体	1
		文字	1	会場	4	会場	1	議席	1
		セット	1	組合	4	市町村	1	場面	1
		方式	1	政党	4	トライ	1	病院	1
		番組	1	編成	4	駅	1	パターン	1
		役	1	タイトル	4	テーマ	1	部門	1
		票	1	階級	3	議会	1	コース	1
		成分	1	球団	3	選挙区	1	会場	1
		コース	1	条件	3	科目	1	駅	1
		総計	452	票	3	総計	899	選挙区	1
								タイプ	2
								総計	539

果たす。この「名詞の数量を示す」という基本的な機能を果たしているために、Qとなる名詞型助数詞は、典型的な助数詞に近い使われ方になっているのではないと思われる。先行詞Nに比べ、Q部のnは、より接辞に近い働きをしているものと捉えられる。

5.2.2 QノNC型

QノNC型は51種とNCQ型に次いで語例の種類が少なく、また突出して「種類」という語の使用が多いことがわかる（全体の49.7%）。語例の意味分野別に見ると、「抽象的關係」が32種410例と最も多く、次ぐ「精神・行為」の11種22例、「人間主体」の7種19例と大きく差があった。「生産物」は1種1例のみ、「自然物」に該当する例はなかった。「抽象的關係」が最も多く、「精神・行為」「人間主体」と種類・用例数が続くという点では、QノNC型はNCQ型と似た傾向を示しているが、用例の半数が1語に集中していることを考えると、QノNC型の方が偏った結果になっているといえる。Downing（1996）の小説を中心に収集した調査では、QノNC型が最も多いとされているが、岩田（2013）では、新聞においてはQノNC型が少ないことが指摘されている。本調査で扱うのは、典型的な助数詞からなる数量詞ではないが、同じ傾向を見せているといえるだろう。また、岩田（2013）によれば、QノNC型は同質な集合物を表すという。「すべてN」という集合を表すため、固有名詞では使いにくくなる（7）。

（6）拉致被害者の蓮池薫さん（45）ら5人が参加し…

（7）*5人の蓮池薫さん（45）らが参加し… 岩田（2013:101より引用）

表2のQノNC型の語例に抽象的關係の語が多く、「種類」という名詞が選ばれるのも、この「同質な集合物を表す」という特徴からのものと考えられる。その他の名詞の用例（8）（9）においても、同質な集合物を示していると読み取れる結果となった。

（8）現在、44機種の白熱電球をインドネシアで生産しており（6/16経）

（9）5タイプの個室があり、いずれも広さ18平方メートル（11/25特）

また、（10）のように、形式としてはQノNCという型になっているが、Q部の前にさらに名詞が来るものもここに含めた。こうした例は50例あったため、これらを除くとすれば、QノNC型はさらに数が少なくなる。名詞型助数詞としても使われにくい形式であるといえる。

（10）予備校側は国数英など4教科の授業を年間4回ずつ診断。（7/17家）

5.2.3 NQC型

語例の種類、用例数ともに最も多かったのがNQC型である。語例の意味分野では、「抽象的關係」が40種318例と最も多かったが、次ぐ「精神・行為」は23種309例、「人間主体」は34種246例とこの3分野の使用差はさほど大きくない。ただし、196例が「試合」に集中しており、そのほか「選手」「団体」「チーム」など、頻度の高い語を見ると、スポーツ関連の記事で多く使われているといえる。紙面別に見ても、スポーツ面での使用が279例と最も多かった。NQC型は新聞での使用が多いとされ（日本語記述文法研究会編（2009））、また岩田（2013）によれば、Qに重点を置いて表現したい時に用いられるという。そのため、数値が重要となる、スポーツの試合結果などの報道で好んで使われることが予想される。名詞型助数詞を用いた構文でも、NQC型が新聞で使われやすいという傾向は変わらないといえるだろう。なお、機能の面では、3.1節で述べた宇都宮の「付加」機能にあたるもの（11）、「統合」機能にあたるもの（12）のどちらも用例として見られたが、同格の意味を示す「付加」機能のものは少なく、総数を示す「統合」として読み取れるものの方が多かった。

（11）先日、第一生命保険が恒例の「サラリーマン川柳コンクール」の全国入選作品100句を発表した。（3/6家）

（12）ファッションデザイナーら7アーティストがデザインし（6/14総）

5.2.4 NノQC型

NノQC型は、QノNC型、NQC型と比べて、高頻度の語が1語に集中していない。また意味分野別に見ると、語例の種類こそ「抽象的關係」が多かった（36種）ものの、語の頻度は「人間主体」が最も多い（214例33種）という特徴が見られた。3.1節でNノQC型は、部分数を表す、宇都宮でいう「分析」機能と、総数を示す「統合」機能、さらに岩田のいう、「NがQの属性を示す」機能があることを述べたが、用例を見ると、（13）のような

付加的同格、すなわち「統合」機能の方が多かった。部分数を表していると読み取れる例は(14)のような「全国」「国内」といったN以外ではやや成立しにくいようであった。

(13) 各議席には白色の「賛成」、緑色の「反対」、赤色の「取り消し」の3ボタンを横に並べた投票機が設置され、(4/2一面)

(14) また連絡会議は、全国の38自治体が情報公開条例に請求権の乱用禁止規定を設けている現状に触れ(9/4総)

このように見ると、準助数詞ではどの型も使われているものの、「NQC型」「NノQC型」が多く、また、その中でもQがNの総数を示す「統合」機能で多く用いられているといえる。

5.3 擬似助数詞の語例と出現頻度

擬似助数詞の語例を検索して得られた「数詞＋擬似助数詞」を用いた構文は、NQC型とNノQC型にあたるもののみであった【表3】。副詞的用法のNCQ型のみならず、QノNC型も擬似助数詞を用いた表現ではなく、全体の用例数も準助数詞に比べると少ない。語例の意味分野は「人間主体」に集中しており(NQC型21種47例、NノQC型26種104例)、その他の分野(「抽象的關係」「精神・行為」)は3～4種、全体の1割前後の用例数であった。そして両者とも最も多い語例が「容疑者」であった。また、NQC型では45例(77.8%)、NノQC型では105例(88.9%)と大部分が「統合」機能であり、擬似助数詞を用いた表現は、(15)～(17)のような、「統合」機能の表出に偏って使われると考えられる。また擬似助数詞を用いた「統合」機能では、(16)のようにNが固有名詞であるものが目立った。

(15) 首相は23日夜、防衛、外務など4閣僚を首相公邸に集め、(3/24一面)

(16) 同期に曙、貴乃花、三代目若乃花の3横綱がいた中、(9/11スポ)

(17) 日銀は〈中略〉資金供給先として、群馬銀行(前橋市)や鹿児島銀行(鹿児島市)などの17金融機関を新たに選んだと発表(8/31解)

例(16)では「3横綱」という数量表現の内訳を、「曙、貴乃花、三代目

若乃花」という N が説明している。岩田（2013）において、N ノ QC 型の N が Q の内訳を説明する場合、N には固有名詞が来ることが多いことが指摘されているが、擬似助数詞を用いた表現でもこの形式は見られるといえる。また、「数詞＋準助数詞」が指示する N の固有名詞は、製品名、団体名が主であるのに比べ、「数詞＋擬似助数詞」の場合は人名が目立った。これは擬似助数詞の語例に「人間主体」にあたるものが多いためといえる。なお、最も多い語例であった「容疑者」の前に来る N は、全て固有名詞を列挙するタイプであった。

また、N ノ QC 型において岩田（2013）が指摘する、「中年者の三人」のような、N が Q の属性として解釈できるものについては、擬似助数詞を用いた表現ではそうと読み取れる例は下記の 2 例のみであった。そもそも、擬似助数詞を用いた表現では、数詞の

表3 擬似助数詞

各形式の語例と出現頻度

NQC		N/QC	
名詞	頻度	名詞	頻度
容疑者	13	容疑者	24
被告	5	投手	16
議員	4	新人	14
指標	3	閣僚	14
力士	3	原則	6
閣僚	3	被告	3
事件	3	金融機関	3
金融機関	2	委員	3
投手	2	指標	3
原則	2	姉妹	3
女性	2	県警	2
小学校	1	議員	2
市議	1	弁護士	2
外国人	1	力士	2
会長	1	大関	2
ポスト	1	大国	2
委員	1	指数	2
教授	1	知事	1
大関	1	代表	1
基金	1	公社	1
博士	1	作家	1
部会	1	高校	1
新人	1	幹部	1
労組	1	小学校	1
選挙	1	審議会	1
職員	1	会長	1
社員	1	部会	1
総計	58	社長	1
		横綱	1
		首都	1
		ポスト	1
		市長	1
		総計	118

後、n によって先行詞 N の属性を示しているため、N で Q の属性を示す必要がないと考えられる。つまり、擬似助数詞を用いた表現は「中年者の三人」を「三中年（者）」とするような操作をしているといえる。このような特徴により、(18) (19) は、「姉妹」「議員」という属性に加え、「中年」「キリスト教民主勢力」という情報を更に盛り込んだ表現であると解釈できる。

(18) ばば草物語は〈中略〉中年の4姉妹がそれぞれの人生を歩む、笑いあり涙ありの劇に仕立てたもの。(9/7 総)

(19) イスラム系移民の排斥を主張する自由党の閣外協力にキリスト教民主勢力の2議員が反対しており、(8/23 国)

6. 異質性・同質性から解釈する名詞型助数詞の構文の特徴

5 節では、準助数詞と擬似助数詞がそれぞれどのような構文の型を取るのかについて、2010 年の毎日新聞を対象に調査した結果を記述した。限られた範囲の用例ではあるが、結果をまとめると以下ようになる。「準助数詞」は、四つの形式全てが見られるが、NQC 型が多く、特にスポーツなど数値が重要な文脈で使われる一方で、Q ノ NC 型にあたる例は少なく、語例にも偏りがある。「擬似助数詞」は、四つの形式のうち NQC 型と N ノ QC 型でのみ使われる。両者ともに「Q が N の総数を示し、N が Q の内訳となっている」「統合」機能においてよく用いられ、特に擬似助数詞では偏って用いられる。

Q ノ NC 型が使われにくい要因が「名詞型助数詞」によるものなのか、それとも新聞資料の特徴なのか、現段階では結論づけられないが、名詞型助数詞が NQC 型と N ノ QC 型、特に N の総数を示す「統合」機能で多く使われるという傾向は本調査より見いだすことができた。

岩田 (2013:105) によれば、Q ノ NC 型では「三人の学生たち」ならば「学生たち」という N を底とした質的情報に重点があるため、同質な集合物しか許容せず、一方、「学生たち三人」となる NQC 型は、三人であれば N は何でもよいという解釈が可能となるために同質・異質な集合物ともに許容し、さらに N ノ QC 型では「須田と山本と岩田の三人」のように、NQC 型よりもはっきりと Q に重点が置かれ、積極的に N の異質性を求めることが指摘されている。この、N の集合が自由という点が、名詞型助数詞、特に擬似助数詞に N ノ QC 型が多かった要因に繋がると思われる。一方で、N ノ QC 型の N が固有名詞だと、N がどのような集合なのかは分かりにくくなる。先の「須田と山本と岩田」という N は「人間である」ということ以外に情報がない。そこで、「数詞+擬似助数詞」を用いて「三学生」とすることで、固有名詞が「どのような集合なのか」という「属性規定」を行うことが可

能になる。例えば(20)では、N(下線部)がQ部分(囲み部)の内訳を示し、「T、W、Nの3人」の「人」に対して、「容疑者」という名詞で属性の情報を与えていることになる。

(20) 甲府地検は26日、同社会長のT(67) = 同県U市▽同社経理担当社員のW(51) = 同県N町▽無職のM(69) = 同県M市一の
3容疑者を法人税法違反(脱税)容疑で逮捕した。(2/27社)

つまり、名詞型助数詞は、それが指示するNが異質な集合であっても、Q部の名詞(n)によりその属性を明示することができるのである。「N(先行詞)ノ[数量+n(属性)]」という表現になるといえるだろうか。また、一方で、このようにnが属性規定をすることで「T、W、N」という人物に対し「容疑者」という同質性を持たせる働きがあるとも捉えられる。すなわち、異質性を持ちながら、同質性をも表現していると考えられる。そして、抽象的類型を示す名詞が多い準助数詞よりも、擬似助数詞の方が、より細かな属性規定が可能となり、異質な集合物であっても読み手に伝達ができるため、NQC型やNノQC型に用例が集中するのではないかと考えられる。

そしてこの異質性と同質性という観点をを用いると、他の形式についても以下のような解釈が可能となる。NCQ型では、「再試合が2試合ある」のように、Nという同じものがいくつあるかをQが示す表現となる。つまり、同質性はNが表しているため、Q部のnは同質性も異質性も表さず、単にQとして数量を示す表現となる。一方、QノNC型の語例では「種類」が圧倒的に多く、その他も「分野」「品目」のような下位類を示す名詞が多く見られた(表2)。「44機種の白熱電球」は、一つの白熱電球に44の下位区分があることを示す。この意味で、Q部のnは異質性を表しているといえる。擬似助数詞は、属性規定を行うために、Nに同質性を付与してしまうため、QノNC型を取ることができないのではないだろうか。そのため、NQC型とNノQC型でしか表出できないのではないかと考えられる。

ここまで「定番四形式」に沿って名詞型助数詞の構文を見てきたが、これらはQ部に名詞を用いるからこそ、単なるQとは異なり、さらなる情報を

盛り込める可能性があると考えられる。こうした機能を持つため、従来の数量詞構文の枠組みで分析するのは不十分であると思われる。本稿では新聞のみ、また形式や格を限った調査であったため、今後はより範囲を広げて、名詞型助数詞の構文の様相について、考察を行っていきたい。

[注]

- 1) 成田 (1990) の用語では「名詞と同形の助数詞」。
- 2) 東条 (2014) より引用し一部表示方法を変えた。表中の” | ”は、『分類語彙表』において同じ中項目で分類項目が異なる語を、下線部は 1991 年毎日新聞で 1 例のみの使用だったものを、() は「何〇〇」の例を WEB 検索した可付番性の調査の際に実例が 1 例しか見つからなかったものを示す。いずれも例外的な可能性があるため区別した。
- 3) 成田 (1990) より順序・表記を変えて引用。(2) も同様。
- 4) 本研究で用いた『CD- 毎日新聞データ集』は、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座が毎日新聞社と交わした利用許諾契約・覚書に基づき使用したものである。個人で利用でき、且つ全文検索できる新聞データベースとして、本資料を用いた。
- 5) 「串」「袋」「箱」「粒」「缶」「瓶」「カップ」「バック」「ケース」「鉢」「針」の 11 語。これらは成田 (1990) が「連続量として測られるものを、容器等を目安に数えているもの」やそれに近いとするものである。これらの助数詞は単位に近い働きを示すため、調査対象から外した。
- 6) 東条 (2014) の調査と同様に、洋数字を採用した。
- 7) 『CD- 毎日新聞 2010 データ集』より抽出した用例は、(月／日 掲載紙面種別) の順に示した。掲載紙面の略称は「解＝解説、国＝国際、経＝経済、特＝特集、総＝総合、家＝家庭、社会＝社、スポーツ＝スポ」である。

[引用文献]

- 岩田一成 (2013) 『日本語数量詞の諸相－数量詞は数を表すコトバか』: くろしお出版。
- 宇都宮弘章 (1995) 「数量詞の機能と遊離条件」『共立国際文化』7 共立女子大学国際文学部紀要: 1-27.
- (1996) 「数量詞の機能と形態」『国文学 解釈と鑑賞』61 (1): 53-60.

- 奥津敬一郎 (1969) 「数量的表現の文法」『日本語教育』14: 42-60.
 ——— (1983) 「数量詞移動再論」『人文学報』160: 1-24.
 国立国語研究所 (2004) 『分類語彙表一増補改訂版』: 大日本図書.
 田中佑 (2012) 「日本語助数詞の範囲—名詞と助数詞の連続性—」『筑波応用言語学研究』19: 117-126.
 東条佳奈 (2014) 「名詞型助数詞の類型—助数詞・準助数詞・擬似助数詞—」『日本語の研究』10 (4): 16-31.
 成田徹男 (1990) 「名詞と同形の助数詞」『都大論究』27: 1-8.
 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法 2』: くろしお出版.
 矢澤真人 (1985) 「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」『学習院女子短期大学紀要』23: 96-112.
 Downing, Pamela (1996) *Numeral classifier systems: The case of Japanese*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing.
 Kim, Alan Hyun-Oak (1995) "Word order at the noun phrase level in Japanese: Quantifier constructions and discourse functions." In Pamela Downing, & Michael Noonan (eds.), *Word order in discourse*. pp.199-246 Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing.

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

The Characteristics of Nominal Classifiers in a Sentence

Kana Tojo

In this article numeral classifiers which can be used as nouns as *-daigaku* in *3-daigaku* ‘three (universities)’ or *-hyo* in *3-hyo* ‘three (votes)’ were termed as noun-type numeral classifiers and their usage in sentences was examined through examples in newspaper articles from a syntactic perspective. It has been considered that sentence structures are classified into four types in relation to the host noun (N), quantifier (Q), and case maker (C) in the study of quantifier phrases. Numeral classifiers can be classified into two types: those which can be used with *nan-* ‘how many’ (quasi-classifier) and those which cannot (pseudo-classifier). I then examined the types of sentence structures in which noun-type numeral classifiers are likely to appear in newspapers and analyzed them.

The results were as follows: Quasi-classifiers were found in all four types of sentence structures. NQC, which is used in the context that emphasizes a numerical value, appears the most times. On the other hand, Q-no-NC is the least likely to appear and its phrase examples are also unsystematic. Pseudo-classifiers are used only in NQC and N-no-QC. Both quasi-classifiers and pseudo-classifiers are likely to be used in the case of summative appositive. This usage is very common in pseudo-classifiers. Pseudo-classifiers also tend to provide information about the attributes for N groups by expressing them on specific nouns, e.g., *A, B, C no 3-nin* (3 people of A, B, and C) → *A, B, C no 3-yougisha* (3 suspects of A, B, and C), making it possible to convey information to readers even if the elements of N are heterogeneous. Moreover, sentence structure of nominal classifiers may be related to the heterogeneity and the homogeneity. The expression using “numeral + noun” differs from “numeral + numeral classifier” in that the former can provide additional information by using nouns, suggesting that it is a form which is difficult to understand from the framework of conventional quantifier construction.